



大図研京都ワンディセミナーのご案内

テ ー マ : 『RDA 講習会 in Kyoto』

概 要 : 英米目録規則 (Anglo-American Cataloguing Rules) は「AACR3」に改訂されるのではなく、新たな FRBR、FRAD、FRSAD の概念モデルを基に、2010 年にまったく新しい枠組みの RDA (Resource Description & Access) として刊行されました。すでに LC (Library of Congress) や British Library など世界有数の図書館が 2013 年 4 月から RDA 準拠に変わっています。国際標準の動向として、図書館員は RDA とはどのようなものかを知っておく必要があるでしょう。IAAL (大学図書館支援機構) が東京で 3 回連続講座として実施した講習内容を、今回は 2 回の連続講座として開催します。

※本ワンディセミナーは、IAAL (大学図書館支援機構) との共催です。

開催日時 : 第 1 回 2014 年 2 月 22 日 (土) 13:30-16:30

第 2 回 2014 年 3 月 9 日 (日) 13:30-16:30

会 場 : 京都市国際交流会館 第 1・第 2 会議室

(京都市営地下鉄東西線「蹴上」駅下車 徒歩 5 分)

定 員 : 各回 66 名

共 催 : IAAL (大学図書館支援機構)

参加費 : 各回 会員:2000 円 ※会員とは、大図研会員・IAAL 会員です。

各回 一般:3000 円

※両日ともに終了後懇親会を予定しています。(実費負担)

申込方法 : 大図研京都ワンディセミナー申込フォーム

(<http://www.daitoken.com/kyoto/event/20140222.html>)

からお申し込みください。

申込締切 : 2014 年 2 月 19 日 (水)

※定員になり次第、締め切らせていただきます。

[目 次]

大図研京都ワンディセミナーのご案内	…	1
小特集 : 大図研京都ワンディセミナー「島根大学探訪～図書館での『学び』と『協働』を 考える～」参加報告		
大学図書館での学びと学生	浜田 紳吾	… 2
島根で「学び」について考えました	村上 健治	… 4
新入会員挨拶	中村 敬仁	… 7

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール : kyoto@daitoken.com (大学図書館問題研究会京都支部)

URL : <http://www.daitoken.com/kyoto/index.htm>

小特集:大図研京都ワンディセミナー**「島根大学探訪図書館での『学び』と『協働』を考える～」参加報告****大学図書館での学びと学生****浜田 紳吾**

2013年11月23日に島根大学松江キャンパスで行われた大図研京都ワンディセミナーに参加させていただきました。今回のセミナーは、「図書館での「学び」と「協働」を考える」というテーマに沿って行われ、大学図書館に携わる3名の方のお話を聞くことができました。内容も大学図書館の現状をリアルに反映したもののばかりで、大図研の企画として非常に興味深いものだったと思います。以前もこの場を借りて報告をさせていただいたのですが、私は学生であり、今回の報告は大学図書館の利用者である一学生の目線からの感想として参考にしていただければ幸いです。

学びをデザインする

最初は島根大学で教育開発センター長をしておられる森氏の講演です。その前にフィールドとなる島根大学の現状について説明しておく、他の総合大学と比較して学生が少なく、図書館関係の教員もいないことから「自由に学びをデザインできる」環境が整っているとのことでした。この意味は後々説明していきます。

21世紀の学びとして必要なのは産業革命以降の与えられた課題を効率良く解いていくやり方ではなく、課題を達成したら次の課題を自ら見出して進んでいく情報社会に即したやり方であると森氏はおっしゃいました。今日、全国の大学に次々とラーニング・コモンズが導入されていることからこの理論は合点がいきます。しかしそれは死ぬまで課題に向かって前進するわけですから、学校教育というより生涯教育ということになってきます。学校教育がなくても生涯教育ができる環境、それが図書館なのではないかとのことでした。その理論を大学の図書館に落とし込んだ場合、図書館員が学生の学びの構造を理解し、図書館という場で「デザイン」していくという行動に繋がるようです。

では、デザインの前に理解しておくべき構造とはどういったことなのでしょう。興味深かったのは、「刺激→反応→報酬の繰り返しによる学びの習慣付け」というキーワードでした。森氏の挙げたクイズゲームの例で説明すると、脳は「刺激(問題に回答)→反応(正誤判定)→報酬(次のステージへ)」の繰り返しによって訓練されるとのことです。ここからわかることはいくつかの段階を踏んで目標に向かっていくスモールステップと、自分の行動にすぐさま反応があるという即時フィードバックという2つのことが学びの習慣化のカギになるということです。そうした理論を踏まえた上で、学習環境をデザインするということが話題に移ります。

「浮きこぼれ」を輝かせる図書館

大学における学びの形態として、上に挙げたような教授の話聞いて、仲間と話し合うことが一つのスタンダードな例として挙げることができます。この話し合いの環境を作り出すということが学びをデザインするということです。他にも学生が抱える様々な問題に対して様々な解決のために担うアプローチは多々存在します。その中で私がまさにこれだ！と感じたものがありました。それは、「大学において本当に救わなければならないのは落ちこぼれではなく、浮きこぼれである」ということです。浮きこぼれとは、普通の学生よりも意識やポテンシャルが高く、より高みを目指していった結果、周囲から浮いてしまっている層のことです。森氏はこの層を大学図書館で救うべきだと主張するのです。これは目からうろこでした。落ちこぼれという単語は良く耳にしますし、これを救おうという動きも学内においては比較的良く目にする光景です。しかし森氏はそ

の逆の層に焦点を当てるといいます。例えば数学好きの浮きこぼれ達が問題を自作し、解き合う「算額」や自主ゼミのように大学での専攻研究以外に自分のやりたいことをやられて、自分の能力を発揮する機会を図書館で設けることが必要だということです。言われてみると確かに第一志望大に落ちた不本意入学者層というのはおのずとその大学の平均より高い所に居場所を置きがちです。どの大学にも一定数はいると見込まれるこの不本意入学者や、もとより高い意識を持っている人達を輝かせる場所を図書館が提供するという、今まで考えもしなかった役割を提言されて以降、非常に色々なことを考えましたし、原稿を書いている今でもこの件について思い返してみると新しい考えが浮かんできます。

学生との協働

矢田氏の事例報告もまた刺激的なものでした。島根大学には図書館コンシェルジュと呼ばれる学生図書館スタッフがいるという話でしたが、この図書館における学生協働というのは大変難しいものです。私は大学で学生ライブラリースタッフに所属し、日々図書館スタッフとして活動していますが、正直全てに満足というわけにはいかないのが本音です。ただ、様々な大学の図書館に個人的にお邪魔して見学させてもらいましたが、間違いなくうちの大学図書館における学生の組み込み方はトップクラスだということも理解しているつもりです。何が言いたいのかというと、そのような(協働している学生からすれば)トップクラスと思われる大学図書館のスタッフですら多かれ少なかれ思う所があるわけですから、いわんや他の大学の学生スタッフをや、ということです。ただ島根大学の場合は職員側と学生側のすり合わせ問題というのはあまり感じなかったのが印象的でした。「協働」するに当たって職員と学生の仲は非常に重要なことで、実際に島根大の学生に聞いてみないとわかりませんが、そのあたりは上手くやっているようです。

コンシェルジュの活動内容は多岐にわたります。排架や書架整理、おすすめの資料を紹介するポスターを作成するというのはそれほど珍しいことではありませんが、葉や分類記号の仕切り板までコンシェルジュの方が作られたとのことで感心しました。また、図書館に常にコンシェルジュがいる状態を作ることによって質問しやすい環境を作るといのは非常に素晴らしい体制であると思います。ここ3年の利用統計を見ても、コンシェルジュへの質問が1コマあたり1.6~2.3件来ていることから利用する学生への信頼されている様子が十分にわかるでしょう。このように学生が学生に信頼される関係作りという姿勢が好印象でした。

矢田氏のお話の中で最も参考になった点は、コンシェルジュが正課の授業とリンクした活動もされているとのことでした。学生が図書館での活動を通して大学での学びに貢献できる仕組みはピアラーニングの観点から参考にすべきだと思います。ここからさらに発展して、今後は逆に司書課程履修生をその大学の図書館がインターンシップの要領で受け入れてくれる活動が全国に拡大していったら、学生と図書館が共に成長していけるのになあ、と思いました。また、今回の矢田氏のお話全体を通して、学生を図書館に組み込む側の困難がありありと伝わってきました。それと同時に、学生にできることというのはまだまだ残されているなと感じました。最近、関西の学生を中心として司書の学生有志団体が立ち上がったそうです。このようなやる気ある学生の力を大学図書館でも利用していければより良い環境作りができるのかな、と思います。

「あなただけ特別作戦」

北井氏の事例報告した「あなただけ特別作戦」は、思わず感嘆の声が挙がってしまいました。学生を取り込むにはまず教員から、ということで新しく赴任してきた新任教員に「図書館をよろしくお願いしますね」というお手紙を送るということです。その結果、声を掛けた5人中3人の方から依頼が来たということです。これは比較的規模の小さい島根県立大学だからこそできたことだとは思いますが、このような取り組みが図書館でもできるのだという、今後の大学図書館の可能性を示した前列として素晴らしい成果で

あると感心しました。昨今話題のビジネス支援・課題解決型サービスに代表されるように、十人十色の利用者に合わせた細やかなサービスというのは、図書館の最も大切にすべき原点であると思います。この原点をしっかりと守って活動し、教員とのつながりを強化した事例は大変参考になりました。

上の講演を通して、島根大学・島根県立大学は自分達の持つ特色をしっかりと把握した上でそれを最大限に活かした、非常に上手な運営を行っていると感じました。しかし、森氏もおっしゃっていましたが、先生に聞いたことをそのままそっくり真似することは失敗につながります。上の三例を自分の図書館でどのように引き込んでいくのかということを考えていかなければと思いました。最後になりましたが、今回のセミナーで大学図書館の学びをわかりやすく説明して下さった森様、それぞれの大学における事例の報告をし、質問にも真摯にお答えいただいた矢田様、北井様に心から感謝申し上げます。また、このセミナーを運営して下さいました大図研京都支部の皆様にも厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

はまだ しんご (立命館大学文学部 学生)

小特集:大図研京都ワンディセミナー

「島根大学探訪図書館での『学び』と『協働』を考える～」参加報告

島根で「学び」について考えました

村上 健治

岡山発松江行きの特急「やくも」は、指定席をとっておいた方がいいだろうなあと思いつきながら、みどりの窓口に行くと「満席です」の回答。神在月と出雲大社の大遷宮と休日重なっているのだからしかたがないとあきらめつつ、定刻30分前にホームへ行き、自由席の札の前に並びました。少し早めに並んだ甲斐があり幸いにも座席に座ることができ、車中から雪の美しい大山を眺めた後、幸先のよい松江到着となりました。

標記セミナーが島根大学で11月23日(土)におこなわれるという案内をいただき、「学び」と「協働」のお話に興味があったことに加え、4月にリニューアル・オープンした島根大学附属図書館(松江)が見学できるとあって参加を申し込みました。以下、当日のセミナーの内容を報告します。

■ 学びをデザインする：社会的構成主義の学習観における図書館の役割

島根大学教育・学生支援機構教育開発センター長の森朋子先生から標記演題でご講演いただきました。講演の最初に、図書館員自身が学びのデザイナーになり、学習の理論と実践とを往復することで、勤務している大学図書館にあった学びのデザインを開発して欲しい、と話されたことが全体の結論でした。

森先生のご専門は、学習研究・学習科学・デザイン研究・教育方法学とのことで、比較的新しい分野だそうです。「学び合いの構造」「学びのプロセス」といった理論面の研究と実際に「教育をデザインする」「学びをデザインする」といった実践面の研究とを交互に繰り返しながら研究を進めておられます。

「教育」と「学習」の違い、「教える」と「学ぶ」の違いを産業革命以降におこなわれてきた教育の方法(大量生産のために同じ知識を身につけさせる)と近年、その必要性が注目されるようになった情報知識基盤社会に必要なとされる学び(課題や必要に応じて知識を新たに獲得していかなければならない)の違いを例に説明されました。とはいえ、

実際の授業は「教える」と「学ぶ」の双方で成り立っており、相互に関連させて学習を促進させていく必要があります。「教える」ことには「到達目標」があり、特定の知識・技術を身につけていれば「合格」しますが、「学ぶ」ことの客観的な評価指標は難しそうです。「教える」ことは授業中におこなわれますが、「学ぶ」ことには授業外の時間が果たす役割も大きく、そこに図書館員が活躍する場所があります。

次いで「ミニ学習理論講座」として「行動主義」「認知主義」「構成主義」の解説、新しい学習観として「学びの共同体」「分散認知」「社会的相互作用」の説明がありました。「学びの共同体」で説明された「認知的徒弟制（ピアサポート）」と「社会的相互作用」で説明された「もう一つのピアサポート」の違いが印象に残っています。ピアサポートというと忙しい教授の代わりに大学院生が学部学生を指導する、というような印象をもっていました。実はそうではなく、昔の苦勞を忘れてしまった教授よりも、その学問分野での勉強のしかたを習得するための苦勞をしたばかりの大学院生の方が、勉強のしかたのポイント（苦勞）をよく覚えているので、その記憶が新しいうちに学部学生を指導した方が効果的である、ということだそうです。また「もう一つのピアサポート」は、大学院生と学部学生のように上下関係にあるもののおこなわれるものではなく、同じ学部学生同士でおこなうようなピアサポートである、とのこと。先輩がいうことに疑問を差し挟むことは難しいですが、同僚がいうことであれば、わりと気軽に批判的な疑問を口にすることができます。このようにして批判的思考や考え方のバリエーションを広げていくことがより深い学びにつながる、とのこと。

最後に協調学習に関して2つのウェブサイトが紹介されました。私はまだ読んでいないのですが（^_^;）ご紹介します。なお、CoREFは「これふ」と読みます。

・"CoREF へようこそ". CoREF 大学発教育支援コンソーシアム推進機構.
<http://coref.u-tokyo.ac.jp/>. (参照 2013-11-29) .

・"TEAL-Technology Enabled Active Learning". mit iCampus.
<http://icampus.mit.edu/projects/teal/>. (参照 2013-11-29) .

■事例報告：大学図書館における学生協働の取り組み：島根大学附属図書館 図書館コンシェルジュの活動から

島根大学附属図書館の矢田さんから標記事例報告がありました。各地の大学で「学生協働」が取り組まれている中、島根大学では「図書館コンシェルジュ」という名の学生協働をおこなっています。その目的として

- ・図書館サービスに学生の視点を取り入れること
- ・学生の図書館や学術情報を使う力の育成を支援すること
- ・学生自身の学びと成長を支援すること

をあげられました。

図書館コンシェルジュの始まりは、2010年の「島大GP」に「図書館コンシェルジュ配置による学習支援：学生協働によるピアサポートが育む学ぶ力」が採択されたことです。その後、図書館の耐震改修のために休止した時期があるものの今年で4年目を迎えています。

十数名の学生が参加しており、図書館の利用サポート、正課の授業であるスタートアップセミナーとの連携、図書館サービスの改善提案・企画として、館内マップの作成や手作りの葉作成、書架の間の仕切り板の差し込み、パスファインダーの作成といった活動をしています。

また、2013年9月5日から6日にかけて2日間にわたって、島根大学を会場に「第3回大学図書館学生協働交流シンポジウム」がおこなわれ、全国15大学から100名以上が参加しています。

最後にこれからの課題として、メンバーの入れ替わりによって活動の活発度に変化があるが、今後も継続して実施していくために予算の確保と定量的に成果をあげていくことが必要であること、図書館を核としたラーニング・コミュニティの形成に向けて、学習サポートデスクを活性化させていくことがあげられました。

・"島根大で、第3回大学図書館学生協働交流シンポジウムが開催". カレントアウェアネス-R. 2013-09-20. <http://current.ndl.go.jp/node/24419>. (参照 2013-11-28) .

■事例報告：「あなただけ特別作戦」の実践

島根県立大学短期大学部松江キャンパス図書館の北井さんから標記事例報告がありました。「特別作戦」のきっかけになったのは、7月の福岡支部例会「ハードコア・ノンユーザーの心をつかむ図書館ブランディング：潜在ユーザー発掘大作戦」でおこなわれたグループワークとのことでした。福岡での研修から半年も経たないうちに、グループワークで提案した内容を実際に実践し、その結果として教員へのアプローチが成功し、利用者が増加しているという、とても素晴らしい内容の事例報告でした。

「あなただけ特別作戦」は、新規に採用された教員にアプローチして、チュートリアル・ゼミの時間にデータベースの検索指導等を図書館職員がおこなうというものです。教員にアプローチする際に留意したことは、講義内容の打合せは（例え可能であったとしても）メールで済ませるのではなく、直接先生に会っておこなうこと、図書館が提供するプログラムに沿って内容を組み立てるのではなく、教員のニーズにあわせること、事前に図書館長名で依頼文書を送っておくこと、とのことでした。

最初におこなったことは、昨年と今年の新任の先生5名に連絡をしたことでした。その結果として、図書館でおこなわれる授業が週4コマになり、図書館の資料を使った宿題が出題されるようになり、グループ学習室が増え（1室→2室）、図書館の入館者数が伸び、2013年後期には8名の先生から講義の依頼を受けている、とのことです。

先生と相談していく中で、講義の資料作成に時間がかかることがわかってきたので、ガイダンス用に作成した資料を30分コース、45分コース、60分コースなどとしてウェブサイトに掲載するなど工夫したところ、そのことが図書館でできることの宣伝にもなったという副次的な効果もあったそうです。

今後の課題として「継続していくこと」「ニーズに対応できる職員の能力」「あなただけに特別への覚悟」をあげられました。仕事のレベルの維持・向上は職員数が少ない図書館に共通する悩みだと思いました。

最後に「問題があるということが前進の第一歩」「出来ることから始める」「解決策と一緒に考える仲間」「モチベーションが大事」「研修に行くだけでなく活かす」という5つの言葉で報告を締めくくられました。お話しをうかがいながら、耳が痛いなあと思いつつ、確かにやってみなければ何も変わらないと納得しました。

・"ハードコア・ノンユーザーの心をつかむ図書館ブランディング～潜在ユーザー発掘大作戦～". 大図研福岡支部特別研修企画.

<https://sites.google.com/site/dtkfukuoka/> (参照 2013-11-29) .

・"図書館ガイダンス用資料". 島根県立大学短期大学部松江キャンパス.

<http://matsuec.u-shimane.ac.jp/campus/library/20130419.html> (参照 2013-11-29) .

■ディスカッション

全体のディスカッションはラーニングコモンズでおこなわれました。その中から印象に残ったことをいくつかご紹介します。

島根大学の図書館コンシェルジュについて、時間外開館のアルバイト学生との違い、

コンシェルジュの学内でのブランドイメージはどのようなものなのか、など興味深い質問がありました。

教員と図書館職員との協力に関して、図書館がやっていることを一人一人の先生方に話しかけていくことが重要だ、との指摘がありました。先生も多様なので、図書館からアプローチしても、どのように反応されるのかわかりませんが、これまで図書館は一貫して「待ちの体制」だったので、当然のようにそこから広がり生まれず、結果として図書館は学内／教員から理解されないままになっている、というのが現状です。

今、大学の教育では「落ちこぼれ」ではなく「浮きこぼれ」が課題になっているそうです。「浮きこぼれ」という言い方を初めて聞いたのですが、授業が簡単すぎるので講義を受ける気力を無くしてしまう学生のことだそうです。浮きこぼれの学生に対して図書館から何かしら働きかけていくことができないか、という課題が提示されました。

また、図書館職員はもう少し研究ベースでものを考えてはどうか、ともいわれました。ラーニングコモンズの使われ方の分析など、イメージだけで話しをするのと、データに基づいて話しをするのでは、確かに全く異なるものになると思います。科学研究費を申請することもできます（採択されるかどうかは・・・わかりませんが）。

図書館サービスをデザインするのは図書館職員自身であり、大学によって事情は様々に異なるので、他大学の実践例は参考にはなるけれども、モノマネだけでは必ずしもうまくいくわけではなく、それぞれの大学の状況に応じてアレンジしていくことが必要という指摘など、たくさんの宿題をいただきました。

・"科学研究費助成事業奨励研究". 日本学術振興会.

http://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/11_shourei/. (参照 2013-11-29).

■図書館見学

ディスカッションの後、図書館の見学ツアーをおこなっていただきました。耐震改修・機能改修を終えたばかりの図書館には様々な工夫がこらされており、新しい家具・機器・スペースの使い方など、参考になる点多々ありました。

・"フロアガイド". 島根大学附属図書館.

<http://lisa.shimane-u.ac.jp/menu.asp?mode=l&id=1613&rid=23>. (参照 2013-11-29).

■さいごに

講演、事例報告、ディスカッション、館内ツアーのいずれもとても充実していました。今回のセミナーを企画・実施していただいた、京都支部のみなさま、島根大学の方々にこの場をお借りして、お礼申し上げます。

むらかみ けんじ (滋賀医科大学附属図書館)

京都支部：新入会員挨拶

2011-2013 年度より、新しく京都支部に加入して下さった会員の皆様にご挨拶をいただきました！今後、順次掲載をしてみたいと思いますので、どうぞお楽しみに！

● 中村 敬仁さん

京都橘大学図書館の中村敬仁と申します。実は、この大学図書館問題研究会には、2000年頃から 2007 年頃まで恥ずかしながら幽霊会員として参加しておりました。大学の別部署に異動となったことにより退会したのですが、2012 年に図書館にあらためて異動と

なり、この間2度ほど、ワンディセミナーに非会員で参加したところ、活気のある会であると感じておりました。そのようなときにタイミング良く大図研以外ですでに面識があった方々からの熱烈勧誘もあり、あらためて参加させていただいた次第です。よろしくお願いたします。

幽霊会員当時は、図書館にしながら業務として事務システム支援、情報教育支援、ネットワーク支援に重きが置かれていたこと、図書館を担当する職員は他に数名いたため図書館に在籍しつつも図書館システムに係る部分でのみ関わっていたという状況で、実際の図書館業務に関わることがあまりなく、システム系の担当業務で精一杯であったため図書館業務に興味を持てるほどの余裕もありませんでした。

しかし、今回は、図書館業務もしっかりとこなしていかなければならない立場となり、図書館の業務に正面から向きあうようになって約1年半が経過しました。前回会員時には、興味を持つまでに至らなかったわけですが、大学図書館の現状を少しでも知りたいと大図研のセミナーをはじめ色々な会にできるだけ参加させていただき、現在の大学図書館の状況を少しは感じ取れたのではないかとこのころまでたどり着いてきたと感じています。同時にかつての静的な図書館から動的な図書館への移行期と感じられる今の部署に配置され非常にやりがいのある業務につかせていただいていると感じています。

最後になりましたが、本学の取組状況についてご紹介し自己紹介に代えさせていただきますと思います。現在、一番に取り組んでいるものが電子リソースの有効利用についてです。本学では、いわゆるアグリゲータ系のデータベースの導入はそれなりに進めておりましたが、冊子体から電子ジャーナルへの移行という意味では、ほとんど進んでおりませんでした。多くの大学図書館では電子ジャーナルの契約が進み、OPACの検索サービスだけでなく、電子ジャーナルリストやリンクリゾルバの提供により、契約した電子リソースのみならずオープンアクセス等を含む電子リソースへのナビゲートが進み、その進化系としてディスカバリー・サービスが提供されだしているというのが現状とすると、本学の場合は電子ジャーナル化も進められていないところからすれば周回遅れどころか3週以上の周回遅れといった状況でありました。現在それらの遅れていることを皆様の大学図書館並みになることを目標の一つずつ解消すべく努力しているところです。本学図書館においても今年から、外国雑誌の多くを電子ジャーナル化し、ディスカバリー・サービスも次年度の早い段階でサービスの提供ができるよう現在準備を進めているところです。ラーニング・コモンズなど、教職協同の利用者サービスに注力もしていきたいところなのですが、残念ながら電子リソース関係の環境整備で精一杯といったところです。

今後、会員の皆様と色々なところでお会いすることになると思いますので、司書資格なし図書館初心者マークの私にご教授いただけると幸いです。また、私も知っていることはできるだけお話するようにしておりますので、是非お気軽にお声かけください。大図研という場でお互いに色々な議論に花を咲かせましょう。

なかむら たかひと (京都橘大学図書館情報課)

◇ 会費納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしているところですが、納入率は依然思わしくない状態にあります。既に2013年度(大図研会計年度2013.07-2014.06)に入っておりますので、2013年度の会費の納入をお願い致します。また、2012年度以前の会費をお納めいただいていない会員のみなさま、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願い致します。

会費は、¥7,000(大図研会費：¥5,000+京都支部会費：¥2,000)です。

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員におことづけてください。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904 大学図書館問題研究会京都支部

また、ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部(kyoto@daitoken.com)まで。